

P2-064

唇顎口蓋裂児の離乳過程の問題について

大岡 貴史¹、高野 梨沙²

¹明海大学歯学部 機能保存回復学講座 摂食嚥下リハビリテーション学分野
²明海大学歯学部 社会健康科学講座 口腔衛生学分野

【目的】

唇顎口蓋裂は先天性の顎顔面の形態異常であり、哺乳障害や構音障害など出生時から小児期にかけて様々な問題を生じることが知られている。本研究では、唇顎口蓋裂児の哺乳や離乳過程での問題を把握することを目的に、口唇形成術や閉鎖症による治療および摂食指導を受けた児の記録の検討を行った。

【方法】

対象は、本学付属病院にて口腔外科、矯正歯科、摂食嚥下科を受診した唇顎口蓋裂児28名（男児17名、女児11名）である。染色体異常や脳性麻痺などの先天障害が強く疑われる児は対象から除外した。対象児の診療録から、保護者の主訴、哺乳量、口唇形成術などの時期、Hotz床など閉鎖床の使用時期、対象児の摂食機能などを抜粋し検討を行った。なお、研究実施に際しては本学倫理委員会の承認を得た。

【結果】

対象児の本学病院での初診時年齢は平均 1.7 ± 0.4 か月、摂食嚥下科の初診時年齢は平均 3.6 ± 1.2 か月であった。保護者の主訴として最も多かったものは、「哺乳ができない」「哺乳時間がかかる」などであった。次いで、「体重が増えない」、「どれくらいの量を飲んでいるかわからない」などが多かった。Hotz床の使用は病院の受診直後が最も多く、25名が受診から2週間以内に使用を開始していた。口唇形成術を受けた時の年齢は平均 3.8 ± 0.6 か月であった。初診時の栄養摂取方法は、全員が口蓋裂用の乳首と哺乳瓶を使用していた。また、摂食機能評価については原子反射の異常がみられた児はおらず、全員が吸啜運動は可能であった。その後、口唇形成後はHotz床の再製作や哺乳、離乳指導を行い、全員が離乳を開始できた。一方、離乳期には食物や水分の鼻漏、押しつぶし機能不全、食内容の偏りなど初診時と異なる問題が生じていた。

【結論】

唇顎口蓋裂児における哺乳の問題は、適切な閉鎖床の使用や外科的治療、摂食期のへの支援などにより多くの場合には改善が可能であった。一方、離乳の過程では機能的問題や食行動など様々な問題が新たにみられるため、多面的な対応が必要であることが示唆された。

P2-065

2歳児の哺乳習慣と食行動の関連

富田 かをり¹、高橋 摩理¹、内海 明美¹、
矢澤 正人²、関谷 紗央里²、五十嵐 由美子³、
宮内 恵⁴、平川 知恵⁵、島村 あみ⁶、弘中 祥司¹

¹昭和大学歯学部 スペシャルニーズ口腔医学講座口腔衛生学部門

²新宿区健康部健康づくり課

³新宿区健康部牛込保健センター

⁴新宿区健康部四谷保健センター

⁵新宿区健康部東新宿保健センター

⁶新宿区健康部落合保健センター

【緒言】

演者らは、昨年の本学会学術集会において、2歳未満の乳幼児では一日の哺乳回数や夜間哺乳の有無が食べ方の問題と関連があることを報告した。哺乳習慣は2歳児健診でも一定数認められ、保護者の希望で相談につながるケースもある。本研究では幼児期の保健指導を円滑に進める一助とするために、2歳児の哺乳習慣、甘味食品・甘味飲料の摂取頻度と食行動の問題点の関連について検討した。本研究は昭和大学歯学部医の倫理委員会の承認を受けて行われている。（承認番号2016-013）

【対象と方法】

対象は、平成27~28年度に東京都某区の4つの保健センターで2歳児歯科健診をうけた幼児2508名（男児1244名、女児1264名）である。対象児の月齢は2歳0か月から2歳5か月の範囲で、中央値は2歳1か月であった。健診時のアンケートから、寝る前・夜間の哺乳習慣（以下哺乳習慣）の有無、甘いお菓子の摂取頻度および甘味飲料の摂取頻度を抽出し、食べ方で気になる点についての回答との関連を検討した。統計解析はカイ二乗検定を用い、 $p < 0.05$ を有意水準とした。

【結果と考察】

哺乳習慣がある児は全体の20%で、うち74%が母乳で残りは哺乳瓶でミルクを飲んでいて、食べ方で気になることはないとの回答は哺乳習慣のない児に多く、哺乳習慣の有無と食べ方の問題の有無は有意な関連が認められたが、哺乳様式（母乳／哺乳瓶）による差はなかった。また具体的に食べ方の問題別にみると、「かまない」「時間がかかる」「ためこみ」は哺乳習慣の有無により該当率に差はなかったが、「好き嫌い」「小食・むら食い」の項目では、哺乳習慣のある児で該当率が高かった。「好き嫌い」や「小食・むら食い」があると、親は児の栄養に不安を感じ、母乳やミルクに対する依存から離脱できず、そのことでまた食事の量や幅が増えないという相互作用が起きる可能性が推察された。一方、甘いお菓子や甘味飲料の摂取頻度はいずれも食べ方の問題の有無との関連は認められなかった。アンケートは一週間で何日とるかという質問であり、一日当たりの回数や量を尋ねていないので、詳細についてはさらなる検討が必要と考えられる。保健センター等で実施する保健指導においては、哺乳習慣と食べ方が関連していることを踏まえて、栄養量・口腔機能などを包括的に捉えた指導・支援を検討する必要性が示唆された。